
Double Face

卯月夕吊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Double Face

【Nコード】

N9718V

【作者名】

卯月夕吊

【あらすじ】

とある、《デイモン》と呼ばれる怪物と人類が住む世界。ある街に住む少年は、不思議な人物と出会う。その人物は、今街で噂になっている《ハンター》と呼ばれる謎の人物だった…。

(前書き)

登場人物

- ・ハルト・レティエント…街に住む少年。右目に眼帯をしている。
- ・^{エル}L…ハルトの相棒。兼使い魔。デイモンとは違うらしい。
- ・クレア・クラウス…ハルトが街で会った、旅人。人口音声で会話する。
- ・ハンター…最近噂になっている、強いデイモンを狩る者。

用語

- ・デイモン…魔物。街はデイモン対策に回りを城壁で囲っている。
- ・ダイモン…デイモンを倒す者の総称。

朝。

紅髪の少年は窓から眩しい太陽の光が入ってくる中、まだベッドに
潜り穏やかな寝息を立てていた。

『おい…起きろ』

不意に、少年以外人影が見当たらない部屋で声がする。それは明らか
に少年に向けられたものだった。

『起きろ…起きろ！』

少年は寝苦しそうに寝返りを打つ。だがまだ起きる気配がない。

『つたく…おーきーろーっ！』

「・・・あと5分・・・」

寝言で呟いた少年に、声の主はついに動き出した。

『おーきーやーがーれーっ！』

ボスンっ。

「っあだっ！！」

少年はようやくくはつきり目が覚めたようだ。…声の主が腹の上に落
ちてきたことで。

かなり痛い所に入ったらしい。少年は涙目だ。

『フン、自業自得だろ』

声の主は少年の腹の上で少年を見下ろしている。

その声の主は、少年の髪と同じような紅色をした毛の生き物だった。
見た目だけで言えば、犬に翼が生えたような感じた。しかし、その
大きさはチワワよりも少し小さい。軽く人間の肩に乗れてしまえそ
うなサイズだ。

「だからって酷いよエヒ…痛つつ…」

『おい、さつさと支度しろ。俺がメシ食べねーだろが、ハルト』

しと呼ばれた犬のような生き物が、軽くジャンプし床へ降り立つ。

「うー、乱暴だなあ…はいはい、やりますよっ」と

この世界では、不思議な生き物があちこちに居る。

それらは神話上の悪魔に例えられ、デモンと呼ばれていた。

人類は何とかデモンを倒すための武器を作り、対抗してきた。

今はなんとかデモンの居ない場所に集落を作り、腕っ節の強い者、魔法の力を自在に操る魔術師などを護衛に置いて生活をしてきたのだ。

またデモンを倒すものは守護者に例えられ、ダイモンと呼ばれた。ハルトが住む街も、小さいながらそうやってなんとか続いてきた街だ。

そんな小さな街の片隅で、全速力で走る彼の姿があった。

「なんでもうちよつと早く起こしてくれなかつたんだよ！」

『知るか。夜遅くまで何かやってる方が悪いんだろーが。それより、俺のメシがあんなものでいいとでも？』

「そつちこそ仕方ないじゃないか！もうちよつと早く起こしてくれればいいもの作れたんだけどね！」

『何を・・・』

口論しながら走るハルト。しはちゃっかりハルトの肩の上に乗っている。

「ああもう、遅刻……」

言いかけたところで、ハルトは何かに気付き急停止しようとする。しかしそれは間に合わなかった。

「あつ……」

曲がり角。丁度出てきた人とぶつかってしまったのだ。

二人が尻餅をつく。

「うーっ、つたた…。今日は痛いことばっかだ…」

『何言つてんだ、どっちもお前が悪いんだろ？』

肩の上にしたため激突も尻餅も免れたしが、すんと地面に降り立つ。

『それより、自分からぶつかつておいて謝りもしねえのか？』

「あ、そうだった！すみません、大丈夫ですか？」

「『いえ、僕は大丈夫です…』」

ハルトは違和感を覚えた。声が、普通と違う気がするのだ。

「『それより、君は大丈夫でしたか？かなり急いでみたいですけど』」

「大丈夫です。えっと…？」

ぶつかった人物を、ハルトは改めて見てみた。

頭にはニット帽を被っている。髪、目の色共に薄めの茶色。長い黒いコートに、Ｔシャツにジーンズ。靴はスニーカー。大きめのリュックサックをしょっている。

この街の服装ではないようだった。

現に今のハルトは、紅いジャケットにＴシャツ、少し古い大きめのズボンにサンダルのような靴という格好だ。

「『この格好ですか？僕はちよつとした旅人です。隣の街から来たんです。といつても、まだ旅に出たばかりですが』」

ハルトのまじまじとした視線に気付いたのか、少年が説明してくれる。

「そ、そうなんですか。でも、その声…」

ハルトは躊躇いがちに声のことを聞いてみた。

「『これですか。えっと、病気で…声が出せないんですよ。これは人口音声、というものです』」

少年は手に持っていた、小さい機械のようなものを見せた。これが人口音声を出している機械、らしい。

「あ…なんかすみません。変なこと、聞いちゃったみたいで…」
『本当だな』

しがこつちを見てくる。少しにやにやしてるのは見間違いでないだろう。

「『いえ、慣れてますので。では、これで失礼しますね。急いでいたのなら、もうそろそろ行かないとまずいんじゃないかと』」
言われて、ハルトは思い出した。

「あ、そうだったっ！すみませんでした、本当に！えっと、最後に名前だけお聞きしてもいいですか？」

「『…クレア、です。クレア・クラウス』」

「ありがとうございますっ！えっと、僕はハルト・レティエントです！じゃ、またどこかでお会いしたら！」

ハルトは急いでしを肩に乗せるとまた走り出した。

その夜。ハルトは夜の街を歩いていた。

ハルトは学校には通っておらず、代わりにとある店で見習いとして働いている。親がいないため、そこまでのお金が無いのだ。

朝はなんとかギリギリで店に入ったことを、店の主人は笑って許してくれた。

そして今は、その帰り道だ。

『つたく、親方に感謝しねーとな。つーかいつになったらその寝坊グセは抜けるんだ？』

「う、うるさいな…。それより、仕事に変な話振ってくるのやめてよね。親方とかに変な目で見られるならまだしも、いつものこと

だから『ああ、またか』って目で見られるじゃんか！」

『じゃあ反応すんなよ』

「それが無理だから言ってるの！」

フン、とLは鼻を鳴らした。

Lの声は、ハルト以外の人間には何故だか「クー」という鳴き声にしか聞こえない。だから、こうやって人のいない場所以外だとハルトが一人で喋っているように聞こえてしまうのだ。

『話し相手がいないと暇だろ？』

「寝てればいいじゃん」

『生憎、俺は夜行性じゃないんでな。無理な話だ』

「…なんでそれで早く起きられるのかな…羨ましい…」

『起きられるように努力しろ』

う、と言葉に詰まってしまったハルトに追い討ちをかけるように、Lが続ける。

『目のせいだとか、言い訳はすんなよ？』

「わ、分かってるよ。でもこれ、役には立つけど疲れるんだからさ

…」

『言い訳してんじゃないか。…？』

ふと、Lが黙る。

「何、どうしたの？」

『…その封印も、少しは生きてるみたいだな。おい、外してみる』
ハルトは言われた通り、眼帯を外す。

その下から現れた右目は、左目とは異なり透き通るような水色だった。いわゆる「オッドアイ」というものだ。

外してみてもうやく、ハルトもLが感じていたことに気付いたようだ。

ハルトの右目は、気配などを探れる探知機のような力があつた。ただし、疲れるので普段は魔法をかけた眼帯で抑えているが。

「壁の突破。最近多いな」

『どうせこの街の壁なんてボロいからな。それに、こんな近くまで

来ないと俺が感じれないほどのちよつとしたステルスも備えているようだ。人間にはまず気配なんか感じ取れないだろ。いくらダイモンと言ったってな。人間で感じ取れるなんざ、お前くらいのもんだ」
「強いね。さて、どうやって逃げるか」

「…気付かれたっばいな。こつちに近づいてくる気配がする。目はそのままにしとけ」

「言われなくとも」

街を囲む防御壁。それは最近役割を果たしていないことが多くなってきた。ちよくちよくダイモンの侵入を許してしまうのだ。

ハルトは外した眼帯をポケットにしまい、来た道を走って戻る。

『どこまで行く気だ』

「とにかく、何とかして撒かないと。後はダイモンに任せる」

『そううまくいくか？この時間だ、起きてる奴は少ない』

「今は逃げる！」

ハルトはそう言って走るスピードを若干速めた。

しかし、ハルトが感じる限り、その気配は追って来ているようだ。しかも、かなりの速さで。

追いつかれるのも時間の問題かもしれない。

ハルトは戦う手段など持っていない。武器は勿論、身を守るための武術なども何一つ、だ。

せいぜい出来るのは、逃げて助けを求めることくらい。

「…っは、こんな時に、偶然”ハンター”でも現れてくれたらっ…」
『可能性は低い』

「分かってるっ！…ただの希望的観測だ」

”ハンター”。最近この街の外の平原に現れている、正体不明の、その名の通りデモンを狩る者。

ハンターが狩ったと思われるデモンは、いずれもダイモンが苦戦するレベルであるう強さ。それをいとも簡単に狩って見せる、謎の存在。

ハルトはその存在が現れてくれることを密かに望んだが、それも叶

わないだろうとすぐに望みを打ち消した。

『！来るっ！！』

Lが言い終わらないうちに、地面に亀裂が入る。思ったより、考えている間に近づいてきていたらしい。

ハルトは、足を取られて思わず転んだ。

振り向けば、そこに追跡者がいる。

三メートルはあろうかという長身に、がっしりした体格。おそらく熊のようなタイプのデイモン。

その爪は鋭く尖っていて、それで数々の獲物を狩って来ただろうことが窺い知れる。

つまり、今現在ピンチ。

『《熊型》…厄介だな』

Lが威嚇するように頭を低くし、グルルと唸る。いつでも飛び掛れる体勢だ。

しかし、Lのような小さな体でこの熊グリスリーに向かって行ったとしても、すぐに吹き飛ばされてしまうだろう。

「L、無理するな！」

『わかってらあ。けどな…逃げる隙だけでも稼がなきゃあ駄目だろうが！！』

Lが跳躍する。

真上に。

『今のうちに逃げとけ。後で追いつく。…せーのッ』

そこで大きく息を吸い込むように体を反らし、そして。

『ツラアッ！！』

炎を、吐き出した。

L ハルトの相棒兼、使い魔。

ハルトを守るといふ使命を持った者。

多少の技というか、敵を攻撃するだけのスキルはあるのである。

グリスリー熊は、片手で顔を覆うようにして防御体勢をとる。

炎が止むと、その庇った部分の毛がちりちりと焦げていた。

だが…それだけだった。

外傷も何も無い。

『ツチ、バツカ野郎が！今のうちに逃げとけばよかつたたる！！』
しが後ろをちらりと見る。

そこには、立ち上がっただけのハルトの姿があつた。

『俺のことなんざ構うなツ！テメエは逃げる！』

「嫌だっ！」

『何甘いこと言ってるんだ！』

言つたところで、反撃とばかりに熊が鋭い爪を^{グリスリ}しに向かつて振るう。
舌打ちをしながらしはそれを間一髪で避けた。

続いて、もう一回爪が来る。

それは、しではなくハルトを狙つたもの。

ハルトは殆ど直感で、後ろに体を反らしてなんとか避けた。
だがまたもやその衝撃というか避けた反動で、尻餅をつく。

上には、振りかぶつた熊の鋭い爪。^{グリスリ}
逃げられない。

そう、覚悟した。

ハルトは思わず、目を瞑つた。

「『あーらら、なあんか音がしたと思つたら、こおんなデッカい獲物があるなんてな！ラッキーラッキー』」

熊グリスリーの向こう側から、声がした。

恐る恐る目を開けてみると、振りかぶった体勢のままぶるぶると震えて動けないでいる熊グリスリーが見える。

「かわいいクマちゃんの上位種、ね。確か討伐依頼出されてたんじゃないかなあ？で…おや？人襲ってる？あちゃー…人に見られるじゃん。うん、まあいいか」

こつこつ、とブーツの音が響く。

謎の人物の発した声は、口調はふざけたような感じがするものの、まったくもって抑揚がない。それが、逆に怖かった。

そして何より この人物は、おそらく威圧感ウイパツカントだけで熊グリスリーの動きを止めている。

そんな人間離れた技を持つ、姿の見えない謎の人物に、ハルトと「は背筋が凍ったように感じた。」

熊グリスリーが、ギギと効果音がつきそうなくらいゆつくりと、顔を後ろに向けた。

「うん、じゃあまあ、バイバイ？ここでボクに会ったことが運の尽きだったねー。じゃ、バイ」

軽い調子で言って、謎の人物は回し蹴りを熊グリスリーの頭に向かって放つ。頭が、飛んだ。

一瞬遅れて、首から血が噴き出す。

足は当たっていない。その人物は、蹴りによって起こした衝撃波で首を跳ね飛ばしたのだろう。

ゆつくりと、首をなくした体がこちらに倒れてくるのを感じて、ハルトは慌ててあとずさった。

ドスン、と巨体が地面に倒れる。

それによって、ようやく奥にいた人物が見えた。

ハルトは女かと思った。

体格はすらりとした、そこそこの長身。

薄めの茶色の、腰あたりまで伸ばされた長い髪。

ファーのついた茶色のジャケットを肩に羽織っている。その下は黒

いかケテルドレス。そしてブーツ。

しかし一番目を引くのは、その両腕が太いベルトによって固く強く封じられていることだった。

「あ、あなたは…」

「『ん、合格。あんたって言ったら、殺してたかも。なーんて冗談だけど。はいはい、ボクに何の用？』」

冗談に聞こえない言葉に、ハルトは体をまたびくりと震わせる。

「あなたは、一体…誰、ですか」

「『最初はお礼の言葉がくるんじゃないかなーっと。ま、いいけどさ。そんなに怯えないでいーよ。ボクは獲物にしか興味ナイ。キミは獲物じゃないもんね、えっと、名前？』」

軽い口調、抑揚のない声。それが本当に怖い。それにこれは…

「『うーん、考えたことなかったなあ。みんなはボクを”ハンター”って呼んでるみたいだケド』」

それから、一晩が経った。

昨日ハンターが”狩った”デイモンのことは新聞にもう掲載されていた。

ハルトは珍しく起きて、もうしを連れて街を歩いている。

昨日の出来事が衝撃的過ぎて、寝られなかったのだ。

結局、あの後。

「『ボクのこと、キミになら教えてもいいかも。じゃあさ、明日の朝9時に三番街のホテル3階1号室に来てよ。話すから。じゃ、もう帰るわ。バイバイ』」
そう言っつて、ハンターは元来た道を帰って行つた。

三番街にホテルは一つしかない。そして今、そこに着いたところだ。着くまで、ハルトもしも口を開かなかつた。何が待っているのか。その不安が出ていた。

ロビーに入り、フロントのスタッフに断つてから中に入る。

3階1号室。その部屋の前に着くと、軽くハルトはノックをした。

「『…どうぞー』」

中から声が聞こえる。それで、ハルトは中の人物を確信した。中に入る。

「また会いましたね、クレアさん」

「『待っていました。では、色々と話しましょうか』」

奥のベッドに座る形で、口調とは裏腹にまだ眠そうに目をこすっている、昨日のようにニット帽を被ったクレアがそこにいた。

(後書き)

いかがでしたでしょうか？

この小説は作者の初のオリジナル小説です。

感想などありましたらお願いします。

ただし、悪口や荒らしは止めてください。

では、ここまで読んでくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9718v/>

Double Face

2011年10月8日18時15分発行